福岡歯科大学第2口腔外科学講座における 7年間の入院患者の臨床統計的観察

福岡歯科大学第2口腔外科学講座（主任：古本克磨教授）

上 田 珠 湖・岡 村 光 信・升 井 一 朗
林 升・本 田 武 司・古 本 克 磨

昭和57年12月7日受付

本論文の要旨は昭和55年11月22日，第7回福岡歯科大学学会総会（福岡）において発表した。

A Statistical Study of the Inpatients at the Second Department of Oral Surgery in Fukuoka Dental College during the Past Seven Years

Tamako Ueda, Mitsunobu Okamura, Ichiro Masui

Noboru Hayashi, Takeshi Honda and Katsuma Komoto

Second Department of Oral Surgery (Chief: Prof. Katsuma Komoto)

Fukuoka Dental College, Fukuoka, Japan

It past seven years since the second department of oral surgery of Fukuoka Dental College Hospital had started to work in April 1975. During those years, from April 1975 to March 1982, seven hundred and seventy seven patients were hospitalized and were under treatment.

A statistical study of those patients was made and the results were as follow:

1. According to the diseases, all of the cases were classified into seven groups: inflammation (238 cases, 30.6%), congenital malformation (140 cases, 18.0%), cystic lesion (101 cases, 13.0%), trauma (76 cases, 9.8%), benign tumor (53 cases, 6.8%), malignant tumor (38 cases, 4.9%) and others (131 cases, 16.9%).

2. In age distributions, teen-aged patients were most frequently seen, followed by twenties-aged patients and by children less than 10 years old. There was no significant difference between male and female.

3. According to the classification of areas, 473 patients, which occupied 60.9% of all, were from Fukuoka prefecture and 228 (29.3% of all) were from West district Fukuoka city where Fukuoka Dental College Hospital is located.

4. The admission periods varied from a day to 210 days and their average was about 25 days.

緒 言

昭和50年4月から昭和57年3月までの7カ年間に福岡歯科大学第2口腔外科を受診し、入院加療を必要とした患者777名について臨床的観察を行ったので、その概要を報告する。

調査対象および方法

昭和50年4月1日から昭和57年3月31日までの7年間における外来新患者数は5068名、そのうち入院加療を必要とした患者数は777名で、外来患者に対し15.3%であった。これら入院患者777例を調査対象として、年度別・疾患別頻度、年齢別分布および地区別分布と、さらに各疾患別に分けて観察を行い、各々の入院日数を検討した。なお、同一患者の再入院は各回毎に1例とした。

観察事項および成績

I. 年度別入院患者数

入院患者777例の年度別頻度は表1に示すごとく開設時即ち昭和50年度が81例と最低で、昭和56年度146例が最も多く、年間平均は111例であった。

II. 疾患別

入院患者777例の疾患を炎症、奇形、嚢胞、良性腫瘍、悪性腫瘍、外傷、その他の7項目に分類した。その他の項に含まれる主な疾患は、埋伏歯、齲蝕症、抜歯時偶発症、唾石症、顎関節疾患などである。

疾患別頻度では炎症238例(30.6%)が最も多く、次いで奇形140例(18.0%)、その他131例(16.9%)、嚢胞、101例(13.0%)、外傷76例(9.8%)、良性腫瘍53例(6.8%)、悪性腫瘍38例(4.9%)の順であった(表1)。

III. 年齢および性別

0才から59才までを10年単位で、さらに60才以上を1つのグループとした場合、男性・女性共に10～19才が最も多く、50～59才が最も少なかった。

また、性別では男性391例(50.3%)、女性386例(49.7%)でほとんど差を認めなかった(表2)。

IV. 地区別

各地区を福岡県内と県外、さらに県内を市内と市外、市内についても本大学病院所在地である西区(現在は早良区、城南区、西区に分区されている。)とその他の区に細分した。また県外を九州内と九州外に分けて観察した。

疾患別では炎症は西区88例を中心に福岡県内に多かつ

表1 年 度 別 ・ 疾 患 別 一 覧 表

年 度 疾 患	50	51	52	53	54	55	56	計 (%)
炎 症	31	35	45	28	40	31	28	238 (30.6)
奇 形	20	16	22	21	21	17	23	140 (18.0)
嚢 胞	9	9	28	14	14	14	13	101 (13.0)
良 性 腫 瘍	6	9	9	6	8	10	5	53 (6.8)
悪 性 腫 瘍	2	3	3	5	5	6	14	38 (4.9)
外 傷	5	11	10	13	11	13	13	76 (9.8)
そ の 他	8	19	16	12	7	19	50	131 (16.9)
計	81	102	133	99	106	110	146	777 (100)

表2 年 令 ・ 性 別

年 令 性 別	0～9	10～19	20～29	30～39	40～49	50～59	60～	計 (%)
男 性	75	91	81	46	37	25	36	391 (50.3)
女 性	67	91	79	38	44	33	34	386 (49.7)
計	142	182	160	84	81	58	70	777
(%)	(18.3)	(23.4)	(20.6)	(10.8)	(10.4)	(7.4)	(9.0)	(100)

表3

地 区 別 ・ 疾 患 別

疾 患 地 区	炎 症	奇 形	囊 胞	腫 良 性	瘍 悪 性	外 傷	その他	計 (%)
福岡県内								
福岡市内								
西 区	88	28	34	11	10	28	29	228 (29.3)
他 区	51	14	19	7	4	14	32	141 (18.1)
福岡市外	53	29	25	15	10	11	51	104 (13.4)
福岡県外								
九 州 内	37	54	18	17	12	23	19	180 (23.2)
九 州 外	9	15	5	3	2	0	0	34 (4.4)
計	238	140	101	53	38	76	131	777 (100)

た。奇形では県外で九州内が54例と特に多かった。嚢胞は西区34例、次いで福岡市外25例と福岡県内に多かった。良性腫瘍は九州内17例、次いで福岡市外15例が多かった。悪性腫瘍は九州内が12例と多く、次いで西区および福岡市外が10例と多かった。外傷は西区が28例と最も多く、次いで九州内が23例と多かった。その他では福岡市外が51例と圧倒的に多かった(表3)。

V. 疾患別

A. 炎 症

炎症238例は全て非特異性炎で、そのうち骨膜炎86例(36.1%)と上顎洞炎51例(21.4%)が過半数を占めていた(表4)。

性別では男性116例(48.7%),女性122例(51.3%)

図1 炎症性疾患の年齢・性別頻度

とわずかに女性に多かった。

年齢別では0~29才で133例(55.9%)で過半数を占めていた(図1)。

B. 奇 形

奇形140例についてみると、裂奇形110例(78.6%),下顎前突症28例(20.0%),頬小帯付着位置異常2例(1.4%)で裂奇形が大半を占めていた。

裂奇形をさらに分類すると、唇・顎・口蓋裂55例(50.0%)が最も多く、次いで唇裂35例(31.8%),口蓋裂19例(17.3%),横顔裂1例(0.9%)であった。

表4 炎症性疾患一覧表

疾 患 名	例 数 (%)
骨 膜 炎	86 (36.1)
上 顎 洞 炎	51 (21.4)
蜂 窩 織 炎	25 (10.5)
リンパ節周囲炎	15 (6.3)
歯 槽 骨 炎	13 (5.5)
智 歯 周 囲 炎	12 (5.0)
膿 瘍	9 (3.8)
辺 縁 性 歯 周 炎	7 (2.9)
骨 髄 炎	5 (2.1)
歯 肉 炎	4 (1.7)
唾 液 腺 炎	4 (1.7)
口 内 炎	3 (1.3)
そ の 他	4 (1.6)

表5 奇形の種類・性別

分類 性別	唇裂	裂口蓋裂	奇形 唇・顎・口蓋裂	横顔裂	下顎前突症	頬小帯付着 位置異常	計 (%)
男性	21	7	31	0	7	2	69 (49.3)
女性	14	12	24	1	21	0	71 (50.7)
小計	35	19	55	1	28 (20.0)	2 (1.4)	140 (100)
合計 (%)	101 (78.6)						

表6 嚢胞性疾患の種類・性別

分類 性別	男性	女性	計 (%)
歯源性嚢胞	32	21	53 (52.5)
歯根嚢胞	22	13	35
濾胞性歯嚢胞	8	6	14
残留嚢胞	2	2	4
非歯源性嚢胞	26	22	48 (47.5)
術後性頬部嚢胞	22	14	36
貯留嚢胞	0	6	6
外傷性骨嚢胞	2	1	3
鼻口蓋管嚢胞	2	0	2
鼻歯槽嚢胞	0	1	1
計 (%)	58 (57.5)	43 (42.6)	101 (100)

性別をみると、裂奇形では110例中、男性59例(53.6%)、女性51例(46.4%)とわずかに男性に多く、下顎前突症では反対に男性7例(25.0%)、女性21例(75.0%)と女性に圧倒的に多かった(表5)。

年令的には、裂奇形では1～5才が40例(36.4%)と最も多く、下顎前突症では16～20才が17例(60.7%)と多かった(図2)。

C. 嚢胞

嚢胞101例のうち、歯源性嚢胞53例(52.5%)が非歯源性嚢胞48例(47.5%)よりわずかに多かった。

歯源性嚢胞を分類すると、歯根嚢胞35例(66.0%)が大部分を占め、次いで濾胞性歯嚢胞14例(26.4%)、残留嚢胞4例(7.5%)であった。

非歯源性嚢胞では、術後性頬部嚢胞36例(73.5%)が圧倒的に多く、次いで貯留嚢胞(粘液嚢胞、ガマ腫)6例(12.2%)であった。

性別では、歯源性嚢胞は男性32例(60.4%)、女性21

例(39.6%)で男性に多く、非歯源性嚢胞は男性26例(54.2%)、女性22例(45.8%)で同様に男性に多くみられた(表6)。

年令別では、歯源性嚢胞は20才代を最高に各年令層に分布していた。非歯源性嚢胞では30才代、40才代に特に多くみられた(図3)。

D. 良性腫瘍

良性腫瘍53例中、歯源性腫瘍21例(39.6%)、非歯源性腫瘍32例(60.4%)であった。

歯源性腫瘍を分類するとエナメル上皮腫19例(90.5%)、歯牙腫2例(9.5%)とエナメル上皮腫が圧倒的に多かった。

非歯源性腫瘍では血管腫7例(21.9%)、多形性腺腫6例(18.8%)、線維腫およびエプーリスがそれぞれ5例(15.6%)、脂肪腫4例(12.5%)が主なものであった。

図2 裂奇形・下顎前突症の年令分布

表7 良性腫瘍の種類・性別

分類	性別	男性	女性	計 (%)
歯原性腫瘍		6	15	21 (39.6)
エナメル上皮腫		6	13	19
歯牙腫		0	2	2
非歯原性腫瘍		14	18	32 (60.4)
血管腫		2	5	7
多形性腺腫		3	3	6
線維腫		2	3	5
エプーリス		1	4	5
脂肪腫		3	1	4
乳頭腫		1	1	2
その他		2	1	3
計 (%)		20 (37.7)	33 (62.3)	53 (100)

表8 悪性腫瘍の種類・部位別

種類 部位	癌腫 扁平 上皮癌	肉腫 その他	肉腫 粘液肉腫	肉腫 細網肉腫	計
上顎	13		2		15
下顎	6				6
舌	11				11
口腔底	2				2
歯肉	1				1
軟口蓋	1			1	2
頬粘膜	1				1
計	35	0	2	1	38
	35		3		

性別では歯原性腫瘍は女性15例(71.4%)で男性6例(28.6%)に対し圧倒的に多く、また非歯原性腫瘍では女性18例(56.3%)が男性14例(43.8%)に対しわずかに多かった(表7)。

年令的には歯原性腫瘍では16~69才の範囲で20才代を中心に加齢的に減少傾向にあるのに対し、非歯原性腫瘍では8~79才の範囲で40才代、60才以上が高値を示していた(図4)。

E. 悪性腫瘍

悪性腫瘍38例中、癌腫35例(92.1%)、肉腫3例(7.9

%)と癌腫が圧倒的に多かった。

癌腫はすべて扁平上皮癌で、部位別に分類すると上顎13例(37.1%)、舌11例(31.4%)、次いで下顎6例(17.1%)に多くみられた。また、少数ながら肉腫は上顎粘液肉腫2例と軟口蓋部細網肉腫1例の3例がみられた(表8)。

性別では癌腫において性差は認めず、肉腫は3例すべて男性であった。

年令的には癌腫は25~94才の範囲で60才以上に多く、また肉腫では53~69才の範囲でみられた(図5)。

F. 外傷

外傷76例についてみると骨折67例(88.2%)、軟組織外傷6例(7.9%)、歯牙外傷3例(3.9%)と圧倒的に骨折が多かった。

図3 嚢胞性疾患の年令分布

図4 良性腫瘍の年令分布

骨折をさらに分類すると下顎骨骨折44例(65.7%)がその半数以上を占め、次いで上顎骨骨折13例(19.4%)、下顎歯槽骨骨折7例(9.2%)、上顎歯槽骨骨折1例(1.3%)であった。

性別では男性が女性の約3倍の受傷率を示した(表9)。

年齢的には1~68才の範囲ではあるが、30才以下がその大部分を占めていた。

G. その他

表10に示すその他の疾患131例のうちわけは埋伏歯64例(48.9%)、齲蝕症40例(30.5%)、抜歯時偶発症10例(7.1%)、唾石症8例(5.7%)、顎関節疾患2例(1.5%)、その他(乳歯晚期残存、軟組織内異物迷入、外骨症、内骨症、口蓋麻痺、三叉神経痛および上口唇瘻痕お

のこの1例)7例(4.9%)であった。

埋伏歯64例をさらに分類すると智歯を含む永久歯埋伏58例(90.6%)、過剰歯埋伏6例(9.4%)であった。

抜歯時偶発症のため短期間の入院を要した患者は10例で、さらに分類すると上顎洞内歯牙迷入3例(30.0%)、抜歯後出血3例(30.0%)、疼痛性ショック2例(20.0%)、血圧上昇1例(10.0%)、局所麻酔剤中毒1例(10.0%)であった。

表9 外傷の種類(部位)・性別

分類 \ 性別	男 性	女 性	計 (%)
軟 組 織 外 傷	4	2	6 (7.9)
顔 面 裂 傷	2	0	2
上 顎 部 裂 傷	1	0	1
硬口蓋部裂傷	0	1	1
頭 部 裂 傷	1	1	2
歯 牙 外 傷	2	1	3 (3.9)
歯 牙 脱 臼	2	1	3
骨 折	51	16	67 (88.2)
上 顎 骨 骨 折	11	2	13
下 顎 骨 骨 折	36	8	44
頰 骨 骨 折	1	1	2
上顎歯槽骨骨折	1	0	1
下顎歯槽骨骨折	6	2	7
計 (%)	57 (75.0)	19 (25.0)	76 (100)

図5 悪性腫瘍の年齢分布

図6 疾患別平均入院日数

表10 その他の疾患

疾 患	例 数 (%)
埋 伏 歯	64 (48.9)
永 久 歯	58
過 剰 歯	6
齲 蝕 症 (多数歯)	40 (30.5)
抜 歯 時 偶 発 症	10 (7.1)
唾 石 症	8 (5.7)
顎 関 節 疾 患	2 (1.5)
そ の 他	7 (4.9)
計	131 (100)

顎関節疾患は2例で顎関節脱臼、顎関節症がおのおの1例ずつであった(表10)。

VI. 平均入院日数

入院の最短期間は1日で、最長期間は210日であった。全疾患についての平均入院日数は25.43日で、各疾患別の平均入院日数は図6に示す通りである。最高は悪性腫瘍で66日、次いで良性腫瘍および奇形が38日、外傷32日、嚢胞21日、炎症17日、その他10日の順であった(図6)。

考 察

今回、私たちは歯科入院患者の実態を明らかにし、地域的制約の強い本学口腔外科のあり方を知るため過去7年間に当科にて入院加療を行なった777名について臨床統計的観察を行なった。

これら患者は手術侵襲が大きいため術前・術後の管理が必要なもの、外来初診時すでに重症であるもの、全身疾患のため他科との併診が必要なもの、遠隔地よりの受診で通院不可能なものなどである。

外来新患者5068名に対し入院患者は777名で、その比率は15.3%であったが、各病院の報告率3.7~7.6%¹⁻⁴⁾をはるかに上まわっているのは、当病院で地域的に恵まれないながらも内科・外科を併設しているので、かなり重症患者の受診が多いこと、また、遠隔地よりの受診患者数が多いためであると思われる。

年度別推移では昭和50年度81例を最低に経年的に増加傾向にあり、昭和56年度146例は各新設歯科大学創設後の単科の入院患者数にほぼ匹敵している^{1,5)}。

疾患別では炎症30.6%が最も多く、次いで奇形18.0%、嚢胞13.0%、外傷9.8%、良性腫瘍6.8%、悪性腫瘍4.9%などの順で藤岡ら(1971)¹⁾、扇内ら(1975)⁴⁾、片山ら(1978)⁶⁾の報告とほぼ同様の傾向にあったが、大都市における関山ら(1968)²⁾、本田ら(1974)³⁾の報告をみると奇形の症例数が多く、この点、当大学病院と他病院の地域差および各病院の特殊性を示唆しているようで興味深い。

年齢および性別では、ともに10才代を最高に経年的に減少傾向にあり、0~30才で症例の半数以上を占めていた。これは炎症、奇形、嚢胞、外傷、埋伏など症例数の多いものが集中していたためである。また総数において性差は認めなかった。

地区別では当大学病院所在地である福岡市西区(最近城南・早良・西区に区分した。)が合計では多いが、奇形では圧倒的に、また腫瘍ではわずかながら市内、

市外よりも県外の九州地区内が多かった。

各疾患別の特徴としては、炎症は全て非特異性炎であり、また他病院の報告と比較しても入院症例数が多く、当地方の公衆衛生の普及が未だ不十分であることが示唆される。年令的には20才代を最高に、次いで10才未満に多かったが、各年令層にわたって認められ、性別ではほとんど性差は認められなかった。

奇形については他病院の報告と比較して当科での占める割合は少ないが、近年、下顎前突症にて入院加療した症例数が増加傾向にあり、これは当科の特色の一つと思われる。年令的には裂奇形では2~4カ月で口唇初回手術を、また1~3才で口蓋形成術を行なった症例が多かったが、全体的に二次形成術の目的で入院加療を行なった症例が多かった。性別では唇裂、唇・顎・口蓋裂が男性に多く、口蓋裂は女性に多かった。他に顔面裂では横顔裂を1例認めた。

嚢胞については歯源性嚢胞52.5%、非歯源性嚢胞47.5%と歯源性嚢胞が多く、炎症と同様に齦齩症に続発する歯根嚢胞がそのうち66.0%を占めていた。非歯源性嚢胞では顎骨内嚢胞41例(術後性頬部嚢胞36例、外傷性骨嚢胞3例、鼻口蓋管嚢胞2例)、軟組織内嚢胞7例(停滞嚢胞6例、鼻歯槽嚢胞1例)であった。年令的には歯源性嚢胞は20才代を最高に各年令層に、また非歯源性嚢胞は30才代、40才代に特に多かった。性別では歯源性嚢胞、非歯源性嚢胞ともに男性に多かった。

良性腫瘍については、歯源性腫瘍39.6%、非歯源性腫瘍60.4%で後者が約1.5倍であった。年令的には歯源性腫瘍は20才代を中心に若年層に、非歯源性腫瘍は40才代、60才以上を中心に高年令層に多かった。性別では歯源性腫瘍は圧倒的に、また非歯源性腫瘍はわずかに女性に多かった。

悪性腫瘍については癌腫92.1%、肉腫7.9%で前者が約11.7倍の発病率を示した。癌腫は全て扁平上皮癌で、部位では上顎および舌に多くみられた。年令的には60才以上に多く性差はみられなかった。

外傷については骨折がそのうち88.2%を占め、その中でも下顎骨骨折が65.7%を占めていた。年令的には20才代までの若年層に多く、また男性が女性の約3倍の受傷率を示していた。

その他131例のうち埋伏歯が約半数を占めているのは、近年、歯牙矯正のため埋伏智歯抜歯にて入院加療を行なった症例が増加傾向にあるためである。

平均入院日数については関山ら(1968)²⁾の報告と比較して当科での奇形、良性腫瘍、外傷での入院日数がや

や長いようである。最も大きな理由は、当病院が交通および地理的条件に恵まれず、術後通院が困難なことが挙げられよう。そこで、奇形では下顎前突症を含み、下顎後退術施行後の十分な固定期間を入院中にとったこと、良性腫瘍ではエナメル上皮腫等の多くの症例で、顎骨の実質欠損に対する再建術後、固定に十分な期間入院させたこと、また外傷症例でも同様に骨折の固定期間中入院せしめたためであるが、いずれにしろ各病院、各科における疾患の内容や診療方針などの差異によるものと思われる。

結 語

福岡歯科大学病院第2口腔外科学講座が開設された昭和50年4月1日より昭和57年3月31日までの7年間に、当科にて入院加療を行なった777名の患者の臨床統計的

観察を行ない若干の考察を加えて報告した。

A. 疾患別では炎症238例(30.6%)が最も多く、次いで奇形140例(18.0%)、その他131例(16.9%)、嚢胞101例(13.0%)、外傷76例(9.8%)、良性腫瘍35例(6.8%)、悪性腫瘍38例(4.9%)の順であった。

B. 年齢別では10才代が最も多く、次いで20才代、10才以下の順で、特に性差は認めなかった。

C. 入院患者の地区別頻度をみると、当大学病院所在地区が圧倒的に多く、福岡県内だけで473名(60.9%)を占めていた。

D. 入院期間の最短1日、最長210日、平均入院日数25.43日で、主な疾患別の平均入院日数は炎症17日、奇形38日、嚢胞21日、良性腫瘍38日、悪性腫瘍66日、外傷32日、その他10日であった。

引 用 文 献

- 1) 藤岡幸雄・大橋 靖・関山三郎・工藤啓吾・小川邦明・玉木功一・本間隆義・小笠原佑吉・鈴木孝三・青村修明・中里紘一・柳沢 融：岩手医科大学歯学部口腔外科創設後5年間における入院患者の臨床統計的観察。口科誌 20：592—600, 1971.
- 2) 関山三郎・茂木克俊・戸塚盛雄・北山善之進・榎木昭二・加子竜一郎・南雲正男：1966年度1年間における歯科病棟口腔外科入院患者654例の症例分析。口科誌 17：578—586, 1968.
- 3) 本田光徳・須山 亮・端山真次：大阪労災病院口腔外科開設後10年間における入院患者の臨床統計的観察。日口外誌 20：347—353, 1974.
- 4) 扇内秀樹・鈴木悦雄・中村嘉夫・阿部広幸：本学口腔外科における過去5年間の入院患者の臨床統計的観察。東女医大誌 45：278—285, 1975.
- 5) 石川武憲・渡辺義明・森次宣生・田中昭裕・吉岡 濟・広瀬洋二・服部千秋・石川雅夫・山本美朗・角田豊作：城西歯科大学における入院患者の統計的観察。城歯大紀要 4：269—275, 1975.
- 6) 片山 巖・原 潤一・林 翔・重本秀明・札幌郁生・門田誠四郎・辰川 博・井上真一・瀬山 淳・赤嶺正之：双三中央病院歯科口腔外科における入院患者の臨床統計的観察。広島歯科医学雑誌 6(1)：21—27, 1978.